

## 「インド洋大津波に生きていた教訓」(協同組合通信/日和見論弾)平成17年1月26日

昨年12月26日15時4分、気象庁はインド洋(北緯6.9度、東経93.0度)で、13時30分に地震が発生したと発表した。年末に飛び込んできた、インドネシアスマトラ沖巨大地震とインド洋大津波に関する第一報。その後、ニュースに接する度に、被害の大きさが増大している。避寒地として、バカンスに出かけたヨーロッパ人や多くの同胞が犠牲になった。冬休みを楽しむ家族の海外旅行が一瞬で暗転した。

「海水引いたら大津波」昔の教訓で被害最小限の見出し(1月4日付毎日新聞)。

インドネシアのシムル島は震源地から60キロで、住民65000人のうち、津波による死者は6人。一方、同島の東南140キロにあるニアス島の住民は、海水が引いた時、海岸に残った魚をとるのに夢中で、何と227人が死亡したという。シムル島の住民ユスマンさんの地元メディアのコメントが、津波に対する行動の原則を示唆している。「海水が引いたら次に、必ず大きな波が来るという教えが昔からある」。住民はこの言伝えを守り、水が引くと、すぐに丘に避難した。この教訓は、1907年に経験した大津波「海水が引いたら高台に逃げろ」という伝統的な教えとして、住民の間に語り継がれていたのだ。

国連も大規模な地震・津波観測通報システムの構築に乗り出したようだが、この話を忘れてはならない。住民や家族の日常の会話が生死を分けた。ITの普及が急速だが、ITに負けない語り継ぐ実践された教訓の意味は大きい。

被災者に哀悼の意を表しつつ、島民のことを折にふれ大いに語り継ぐことが必要。

かって、わが国の老若男女に、あまねく伝承されていた津波に対する教訓が、南国を観光する多くの現代人には忘れ去られていた。誠に、無念な思いがつのる。

さて、当社の「地震番サービス」は多くのユーザに利用されている。震度3以上の有感地震情報には、必ず津波の恐れのあるなしが明記されている。一層、防災情報のリアルタイムサービスに力を入れ、地震に伴う津波などの二次災害防止や減災に役立つようにして行きたいと決意も新たにした。

( 気象情報システム株式会社 高津敏 )